かくも人間的な太宰治

定武禮久

目　次

●はじめに
●太宰治　波乱の三十九年の生涯
誕生から弘前高校での自殺未遂まで
東京帝大時代の自殺未遂や芥川賞落選
パビナール中毒から回復し、結婚と生家との和解まで
終戦後の「斜陽」「人間失格」の執筆から玉川心中まで
●かくも人間的な太宰治
太宰治は、大食漢！
太宰治は、犬が怖くてたまらない！
太宰は、三十二歳にして総入れ歯で、豆腐が大好き！

太宰は自己愛が強くて、似顔絵が大好き！
隣人と天気の挨拶もできず、突然の押し売りに動転する太宰
多額の税金通知を前に、メソメソ泣き周章狼狽する太宰
壇一雄を人質にして遁走した「熱海事件」が『走れメロス』のヒント？
三島由紀夫らに嫌われ、中原中也に毒づかれた太宰
芥川賞受賞を懇願し、落選して恨み節を垂れ逆上する太宰
大御所の志賀直哉に噛み付いた太宰
四回の心中、自殺未遂事件の後の玉川心中

はじめに

平成二十一年は、太宰治生誕百年という節目の年でした。太宰治は、昭和二十三年（一九四八年）六月に玉川上水で入水自殺し、その後半世紀が経過しましたが、その根強い人気は衰える様子がありません。誕生日でもあり遺体発見の日でもある六月十九日の桜桃忌には、三鷹の禅林寺の墓前に花を手向ける方々が多く集まります。

そのような太宰人気ですが、生誕百年を記念して、昨年は、「斜陽」「パンドラの匣(はこ)」「ヴィヨンの妻」が相次いで映画化されました。特に「ヴィヨンの妻」は、松たか子らが主演し、第三十三回モントリオール世界映画祭で監督賞を受賞するなど、大きな話題を呼びました。そして今年は、「人間失格」が春の公開に向けて準備が進められています。書店でも、太宰治のコーナーが設けられ

ているところも多く、新書版でも新しい装丁にしたり、横書きにしたり、さらには漫画本まで登場しています。これらの動きに刺激されて、改めて太宰の作品を読み返し、あるいは新たに触れ、その魅力を再認識される方も多いことでしょう。

他方、太宰治の作品の朗読も、多くの方が取り組んでおられます。私のほうで、皆さんが朗読ブログにアップされておられる朗読を作家・作品ごとに集約して、『日本名作文学朗読選』の形でアップしていますが、そこでは、やはり太宰治の作品が圧倒的多数となっています。今も毎月のように新しい朗読が加わっています。それだけ、今も人を惹きつけるものがあるのでしょう。

そこで、今回、太宰治のさまざまなエピソードを各種の本から集めて、まとめてみました。参考文献は巻末にまとめてありますが、微苦笑を誘うエピソードばかりです。友人、知人となると大変でし

ようが、「しょうもないなぁ・・・」と最後は思ってしまします。
太宰治を身近に感じ、その魅力がいっそう増すお役に立てば幸いです。
なお、冒頭には、太宰治の三十九年の生涯を簡単にご紹介していますので、参考にしていただければ幸いです。

太宰治　波乱の三十九年の生涯

太宰治の人生については、よく知られているとは思いますが、さまざまなエピソードの背景にもなりますので、改めて簡単に振り返っておきましょう。

●　誕生から弘前高校での自殺未遂まで

太宰治の本名は、津島修治。一九〇六年（明治四二年）、青森県津軽の有数の素封家である「津島家」の六男として誕生しました。六男といっても、十一人の子供の十番目です。ただ、一番上の二人

の兄が早くに亡くなりましたので、八人兄弟姉妹の中で育ちました。父親は、婿養子でしたが、県会議員、衆議院議員、多額納税による貴族院議員等をつとめた地元の名士でした。父親が亡くなってからは、長兄の文治、次兄の英治が、実質的に津島家を取り仕切ることとなりました。

太宰は、小さい頃は、母親が病弱で政治家の妻として多忙だったせいでしょうか、叔母に預けられて育ちました。父にも母にも兄にも似ていないと思い、自分は叔母の子ではないかと本気で信じたときもあったようです。叔母からは、数多くの昔噺などを聞かされて育ちました。

また、三歳からは、子守のたけ・・・といっても、小学校を卒業したばかりの十四歳ですが—がついて、文字を教えられたり、本を読まされたりしました。太宰は、文字に異常な興味を持っていたら

しく、尋常小学校入学前なのに、たけが与えた教科書の二巻までを暗誦してしまうほどでした。特別に小学校に机と椅子を与えられたといいますから、やはり幼い頃から人とは違っていたようです。このたけのことは、後々まで懐かしみ、後の長編小説『津軽』で描かれた感動の再会場面は有名です。

小中学校は優秀な成績を収めて卒業し、十八歳のときに弘前高校に入学します。この時代の空気もあり、プロレタリア文学運動にも影響され、創刊した同人誌で、生家を告発する小説を発表します。二十歳で、自らの地主という出身階級に悩んだということらしいですが、カルモチンを大量に服用して最初の自殺未遂を起こします。心酔していた芥川龍之介が「ぼんやりした不安」により自殺したことにショックを受けていたといいますから、それも頭にあったという見方もあります。

●　東京帝大時代の自殺未遂や芥川賞落選

二十一歳にして、東京帝国大学仏文科に入学。この頃は英語、ドイツ語がはやりで、仏文科は定員割れでしたから、無試験入学でした。初めから卒業するつもりはなかったといいます。大学では共産党のシンパ活動に従事。芸妓の小山初代との結婚を望み、家出をさせたことで芸妓の置屋との関係でこじれますが、長兄文治が収めてくれて結婚は認められました。ただし、津島家からは分家除籍する、大学卒業までは仕送りをするという条件でした。これは昭和五年（一九三〇年）秋ですが、直後にカフェの女給田部あつみと鎌倉心中未遂事件を起こします。太宰は生き残りあつみは死亡。太宰は自殺幇助罪で取り調べを受け、新聞にも大きく取り上げられました。

この自殺未遂事件は、その後も、芥川賞受賞を狙った「道化の華」「虚構の春」あるいは、その後の代表作「人間失格」でも繰り返し取り上げられています。

その心中未遂事件の三ヶ月後、芸者から解放された初代と正式に結婚し、五反田で暮らすようになります。共産党のシンパ活動からはやがて離脱。二十四歳から太宰治の筆名で作品を発表するようになりました。「思い出」「魚服記」「葉」などよく知られる作品はこの頃のものです。

その後二十六歳で都新聞の入社試験に失敗し、鎌倉の山で首を吊って自殺未遂。息を吹き返したのもつかの間、急性盲腸炎で入院、重態に陥ります。そして手術で使った鎮痛薬のパビナールが習慣化し中毒になります。一ヵ月の薬代は、平均初任給の七倍の四百円にも達したといいます。武蔵野病院に入退院を繰り返しますが、その

間、「逆行」が芥川賞候補となりますが、次席に。その後も同賞を狙って佐藤春夫や川端康成に懇願しますが、あえなく落選。東京帝大は遂に除籍処分となりました（昭和十一年。二十七歳）。

●　パビナール中毒から回復し、結婚と生家との和解まで

三度にわたる芥川賞受賞の夢も潰えて、太宰は、パビナール中毒が悪化。全治せぬまま入退院を繰り返します。その間、内縁の妻の初代が、美術学校の学生と姦通事件を起こし、翌昭和十二年、水上温泉で初代と心中を図るも未遂に終わり、初代と離別。初代は中国に渡り、後に亡くなったそうです。

昭和十三年、二十九歳で、気が進まないながらも周囲から頼まれ

て太宰の後見役的存在となっていた井伏鱒二の紹介で、富士山に近い御坂峠の天下茶屋に投宿。井伏の伝で、東京女高師（現・御茶ノ水女子大）卒で高等女学校の教師をしていた美知子夫人と見合い。生家からの直接の支援はなかったものの、その旨正直に話して婚約に至りました。この間の天下茶屋での滞在が、名作『富嶽百景』として結実します。

昭和十四年の一月に井伏夫妻の媒酌で結婚式を上げ、甲府に新居を定めます。これで太宰の生活も心身ともに安定し、翌年にかけて、「富嶽百景」「女生徒」「黄金風景」、そして「走れメロス」「思い出」などの代表作を次々と発表。居所も、終の棲家となる三鷹に転居します。これが三十歳のときでした。

昭和十六年は、日米戦争が始まった年ですが、長女の園子が誕生。母の見舞いに実に十年ぶりに津軽の生家に帰郷します。戦局も厳し

くなり文士徴用もありましたが、胸部疾患により免れました。翌十七年には、母危篤のため、初めて妻子同伴で帰郷し、以降、法要や疎開などでたびたび帰郷することになります。

戦時中は、放蕩少年の保険金殺人をもとに書いた「花火」（その後、「日の出前」と改題）が全文削除を命じられたこともあり、古典に発想を得た「右大臣実朝」「新釈諸国話」「お伽草子」を相次いで発表。昭和十九年には、書店からの依頼により津軽地方を旅行し、これを「津軽」として刊行。津軽に疎開中に終戦を迎えました。

● 終戦後の「斜陽」「人間失格」の執筆から玉川心中まで

終戦後から、執筆に専念。坂口安吾や織田作之助とともに、無頼

派作家として注目されるようになります。印税収入も急速に伸びていきます。

他方、生家は、農地改革により土地の没収等で斜陽になったものの、昭和二十一年には長兄の文治が衆議院議員に当選しました。一家は三鷹に戻り、「斜陽」の構想を練ります。これは、昭和十六年に友人らとともに訪ねてきた太田静子の日記がもとになったものです。

昭和二十二年には、さまざまな身辺変化が生じます。二月に小田原の太田静子の別荘を訪ね、ここで受胎して十一月に太田治子が誕生します。認知の求めに応じて、「この子は、私の可愛い子で、父をいつでも誇ってすこやかに育つことを念じている」という「證」を書いています。三月には後に玉川で心中する山崎富栄と三鷹駅前の屋台で知り合ったほか、次女の里子が誕生しました。この間、

「トカトントン」「ヴィヨンの妻」などの作品も発表されています。

そして昭和二十三年（一九四八年）に入ります。春以降、「人間失格」の第一回、「桜桃」を発表。不眠症に悩まされ、喀血したりしました。文壇の大御所だった志賀直哉を批判・罵倒するに至る「如是我聞」を連載したのもこの頃です。そしていよいよ六月十三日、「グッドバイ」の連載原稿を残したまま、山崎富栄とともに雨降りしきる玉川上水で入水自殺してこの世を去ります。遺体は十九日になってやっと発見され、豊島与志雄を葬儀委員長として告別式が行われたのち、三鷹の禅林寺に葬られました。死後、『人間失格』や『桜桃』が刊行されました。以降、これにちなんで、誕生日でもある六月十九日を「桜桃忌」として太宰を偲ぶ会が開かれるようになりました。享年三十九歳。美知子夫人との結婚生活は九年間でした。

その後、美知子夫人は平成九年（一九九七年）まで生き、『回想の太宰治』を刊行しています。享年八十五歳でした。また、「斜陽」のモデルとなった太田静子は、井伏らに、太宰の名誉・作品に関する一切の言動を慎むことを誓約させられるも、これを破って『斜陽日記』を刊行し、波紋を呼びました。その後、一九八二年まで生き、六九歳で死去します。

ちなみに、美知子夫人との間の次女の里子が、後の作家の津島佑子。太田静子との間の娘の太田治子も作家となります。長女の園子の夫となったのが、自民党の重鎮の津島雄二です。

（注）太宰治が書いたまとまった自伝的作品としては、「思い出」「東京八景」「十五年間」があり、参考になります。

かくも人間的な太宰治！

それでは次に、太宰治の極めて身近で人間的な側面を感じさせるエピソードを、いくつかの太宰本の中からピックアップしてご紹介しましょう。

●　太宰治は、大食漢！

まずは、身近なところから、食べ物の話からです。

嵐山光三郎さんの『文人悪食(あくじき)』の太宰治の項目をみると、次のように書いてあります。

「太宰治は、大食漢であり、人一倍食い意地がはっていた。・・・東京に出てきたときは、下宿用の棚の奥にカニやみかんの缶詰ほか保存食を宝物のようにしこたましまいこみ、客の接待用としてサイダーも保管してあった。客用としながらも実は自分用で、思いたてばひたすらガツガツと食べた。その食い散らかしかたはなにかに復讐するような異常さで、訪問した高校時代の友人は、見ているだけでつらくなったという。」

昭和十二年に、井伏鱒二らと三宅島旅行に行ったときには、味噌汁をいつも六杯も飲んでいた由。

嵐山さんは、太宰がかなりの大食らいでも太らなかったのは、左側肺結核症と、パピナール注射による慢性麻薬中毒症、神経質な性格

と不眠症によるものと書いた上で、「太宰が太ってしまったら、さぞ読者は幻滅しただろう。」としていますが、まったく同感です（笑）。

『文人悪食』には、太宰と交遊のあった壇一雄の思い出話も紹介されています。たとえば、太宰と新宿を飲み歩いているとき、太宰は夜店にうずたかく積みあげたカニの山から、一匹のカニを手掴みに選びとり、歩きながらカニを手でむしってムシャムシャと食ったという話。あるいは、太宰は味の素の大の愛好家で、「ぼくが絶対に確信が持てるのは味の素だけだ」と言い、鮭缶を丼のなかに空け、その上に無闇と味の素を振りかけて食ったという話。栄寿司という店で太宰が鶏の丸焼きを指でむしって裂きながら、ムシャムシャと食っては飲んだ狂乱の姿を見て、「大きく開く口のなかから、太宰の金歯が隠見して、頭髪をふり乱して鶏をむしり裂く姿は悪鬼のよ

うだった」という話などなど・・・。
美知子夫人の『回想の太宰治』によると、「太宰には鶏の解体という隠れた趣味があり、頼んでもやりそうにない人なのに、これはかりは自分の仕事と決めている。肉は骨付きのままぶつ切りにして、内臓は捨てるべきものを取り去るだけで、「このときは必ず、『トリは食ってもドリ食うな』と言ってね」というせりふが出る（ドリは臓物の一部）。私のカッポウ着を着てその仕事を楽しんでいる最中、来客があって（居留守を使った）」のだそうで、解体した鶏は、水たきか鍋にして、書生流に豪快に飲みかつ喰うのだそうです。
これだけの食欲と神経症、心中といった話とは、あまりイメージが結びつきませんが、微苦笑を誘われます。

●　太宰治は、犬が怖くてたまらない！

太宰の作品に、「畜犬談」というユーモラスな作品があります。「私は、犬については自信がある。いつの日か、かならず喰いつかれるであろうという自信である。」というのが冒頭の出だしですが、犬が嫌いで怖いので、「私は、まじめに、真剣に、対策を考えた。私はまず犬の心理を研究した。人間については、私もいささか心得があり、たまには的確に、あやまたず指定できたことなどもあったのであるが、犬の心理は、なかなかむずかしい。人の言葉が、犬と人との感情交流にどれだけ役立つものか、それが第一の難問である。言葉が役に立たぬとすれば、お互いの素振り、表情を読み取るよりほかにない。しっぽの動きなどは、重大である。けれども、この、しっぽの動きも、注意して見ているとなかなかに複雑で、容易に読

みきれるものではない。私は、ほとんど絶望した。そうして、はなはだ拙劣な、無能きわまる一法を案出した。あわれな窮余の一策である。私は、とにかく、犬に出逢うと、満面に微笑を湛えて、いさかも害心のないことを示すことにした。夜は、その微笑が見えないかもしれないから、無邪気に童謡を口ずさみ、やさしい人間であることを知らせようと努めた。・・・犬の傍を通る時は、どんなに恐ろしくても、絶対に走ってはならぬ。にこにこ卑しい追従笑いを浮べて、無心そうに首を振り、ゆっくり、ゆっくり、内心、背中に毛虫が十匹這っているような窒息せんばかりの悪寒にやられながらも、ゆっくりゆっくり通るのである。」と書かれています。

そして「むやみやたらに御機嫌とっているうちに、ここに意外の現象が現われた。私は、犬に好かれてしまったのである。尾を振って、ぞろぞろ後についてくる。私は、じだんだ踏んだ。じつに皮肉であ

る。」とあり、読者を笑わせます。
これは、小説の上でのフィクションかと思うとそうで、実話に近いようです。太宰の美知子夫人の『回想の太宰治』には、新婚時代を過ごした甲府の御崎町でのことが書かれていて、その中に、犬のことが書かれています。

「犬のことでは驚いた。その頃甲府では犬はたいてい放し飼いで、街には野犬が横行していた。一緒に歩いていた太宰が突如、路傍の汚れた残雪の山、といってもせいぜい五十センチくらいの山にかけ上がった。前方で犬の喧嘩が始まりそうな形勢なのを逸早く察して、難を避けたつもりだったのである。それほど犬嫌いの彼がある日、後についてきた仔犬に『卵をやれ』という。愛情からではない。怖ろしくて、手なづけるための軟弱外交なのである。」

ちなみに、美知子夫人は、「彼のこの後の人間関係をみると、やはり『仔犬に卵』式のように思われる」と振り返っています。

●　太宰は、三十二歳にして総入れ歯で、豆腐が大好き！

太宰は、新婚の甲府時代には、八畳と三畳の二間だけの庵のような家に落ち着きましたが、近くに酒屋、煙草屋、豆腐屋の三つの「彼に不可欠の店」があったので、便利だったといいます。美知子夫人の『回想の太宰治』には、次のようにあります。

「酒の肴はもっぱら湯豆腐で、『津島さんではふたりきりなのに、何丁も豆腐を買ってどうするんだろう』と近隣で噂されているとい

うことが、廻り廻って私の耳に入り、呆れたことがある。太宰の説によると、『豆腐は酒の毒を消す。味噌汁は煙草の毒を消す』というのだが、じつは歯がわるいのと、何丁平らげても高がしれているところから豆腐を好むのである。」

同書では、「昭和十六年の夏までの太宰治の歯は、俗に『みそっ歯』というが、小さい三角形の歯の残欠ばかりで、歯らしい歯は一本も見えない上、そのみそっ歯が、日本の昔の女性の鉄漿(おはぐろ)のように黒くて、彼の容貌の大きな特徴になっていた。あるとき太宰が両手の親指を唇の両端にかけ、残る四本の指を左右のこめかみに当てて唇をつり上げて見せた。口の避けた恐ろしい般若が現れた。・・・むき出された黒い尖った歯が機器を増す上で大変効果的で、彼自身それを承知でやっているように思われた。鏡に向かって、いろいろな表情を作ってみたことあるに違いない」と書かれて

います。

入れ歯にすることを勧めたのは、長女誕生前後のことだそうで、渋る太宰を説き伏せて、井の頭公園近くの有田医院に通うことになった由。有田氏によれば、職業は聞かない場合が多いが、その一風変わった風体といい、年のわりに悪い歯といい、つい職業を聞いてしまったそうです。それで初診の日から悪い歯を抜き始めて、三十二歳という若さで総入れ歯に近くなってしまった由。

美知子夫人は、「長い間通って義歯ができあがり、男ぶりが数段増すかと思いの外、白いにょきにょきした義歯が顔になじまなくて、見なれた黒い歯のときの方が数段よかったような気がした」と回想しています。

●　太宰は自己愛が強くて、似顔絵が大好き！

太宰の代表作品、『人間失格』では、お道化で人を笑わす姿が出てきて、どうやったら人を笑わすことができるかに意を払っています。『思い出』では、次のように書かれています。

「私は顔に興味を持っていたのである。読書にあきると手鏡をとり出し、微笑んだり眉をひそめたり頬杖ついて思案にくれたりして、その表情をあかず眺めた。私は必ず人を笑わせることのできる表情を会得した。目を細くして鼻を皺め、口を小さく尖らすと、小熊のようで可愛かったのである。・・・私のすぐの姉はそのじぶん、まちの県立病院の内科へ入院していたが、私は姉を見舞いに行ってその顔をして見せると、姉は腹をおさえて寝台の上をころげ廻った。」

手鏡には驚きますが、太宰の似顔絵好きも、その延長でしょう。似顔絵といっても自分の似顔絵ばかりです。美知子夫人の『回想の太宰治』には、

「高校三年のときの英語のテキストが一冊遺っている。・・・その表紙裏や本分の余白に、いくつものいくつも自分の顔がいたずら描きしてあり、ペンで描いた自分の顔の間に、本名と『瀬川銀十郎』『大藤若太』『小菅銀吉』等の筆名？　が交じって書いてある。・・・中学、高校時代の教科書やノートにも多くの顔が書きこまれているらしい。・・・『自分の寝顔さえスケッチできる』のは事実だったのだ。

このような性癖は、つまりは太宰がいつも自分をみつめている人

だったことを表している。風景にもすれ違う人にも目を奪われず、自分の姿を絶えず意識しながら歩いてゆく人だった。・・・この人は、『見る人』でなく、『見られる人』だと思った。近視眼であったが、精神的にも近視のような感じを受けた。」

と書かれています。太宰は、昭和二十一年の座談会で、「ぼくはね、今まで人の事を書けなかったんですよ」と発言しているそうですが、たしかに、太宰の独白風の作品群を読むとその感を強くします。美知子夫人は、「画家が画で遺す自画像を、彼は文字で書いて遺した。」と書いています。

そして、太宰は、自然のへの関心が薄かったと振り返っています。甲府時代、八十八夜のときに信州に二泊の旅に出かけ、諏訪に泊まったときのこと。夫人は以前来たときのように、高原の自然を満喫

したいと思い、太宰を散歩に誘いますが、蛇が怖いといって、宿に着いたきり、籠もって酒、酒だった由。「これでは、蓼科に来た甲斐がない。この人にとって『自然』あるいは『風景』は、何なのだろう。おのれの心象風景の中にのみ生きているのだろうか――私は盲目の人と連れ立って旅しているような寂しさを感じた。」と夫人は嘆息しています。

美知子夫人の観察眼、表現力の高さには驚くばかりですが、例えば、次のような表現があります。

「この人は自分で自分を啄(つい)ばんでいるようだ」

太宰の自己愛は、時として僻みっぽさにもつながります。美知子夫人が回想するには、「当時A氏の『F』という長編小説が評判で、私は太宰に会ったときの『F』のことを話題にした。話題にしただ

けなのだが、これはよくなかった。そのときは何も言わなかったが、あとあとまで、『お前はAの「F」を言いなんて言ったね』という言い廻しで、太宰という作家を前において、他の現存作家の名や作品を口にしたことを詰った。」

自分は他の多数の女性と付き合っていながら、よくもまあ・・・と呆れてしまいます。

●　隣人と天気の挨拶もできず、突然の押し売りに動転する太宰

『人間失格』の手記に、「自分には、人間の営みというものがいまだに何もわかっていない」「自分ひとり変わっているような、不安と恐怖に襲われるばかりなのです。自分は隣人と、ほとんど会話

できません。何を、どういったらいいのか、わからないのです。」とあります。

現実の太宰もそうだったようです。美知子夫人は、「来客との話は文学か、美術の話に限られていて、隣人と天気の挨拶を交すことも不得手なのである。」とし、三鷹時代に、突然の行商人に動転したときの様子を紹介しています。

「まだこの新開地の環境にも家にもなじまない引越し早々、・・・あるとき花の苗を売り歩く男が庭に入ってきた。生垣がざっと境界になっているだけで誰でも何時でも庭に入ってこれる。これは郊外でよく見かける行商人で、別に贋百姓というわけではないが、特有の強引さで売りつけて、まごまごしているとそこらに植えてしまいそうな勢いである。太宰はまだこの一種の押し売りを相手にしたこ

とがなかったのだろう。机に向かって余念がないとき、突然鼻先に、見知らぬ男が現れたので動転して、喧嘩を売られたような応答をしたので先方もやり返し、険悪な空気になった。結局六本のバラの苗を植えて男は立ち去り、この苗はちゃんと根付いたのであるが、このとき私は太宰という人の、新しい一面を見たと思った。・・・このような行商人との応酬などは一番苦手で、出会いのはじめから平静を失っている。このとき不意打ちだったのもまずかった。・・気の弱い人の常で、人に先手を取られることをきらう。それでいつも人に先廻りばかりして取越苦労するという損な性分である。」

美知子夫人は、「この一件の一部始終を見聞きしていたのに、太宰が小説で書いた内容との食い違いに驚いた」といいます。この薔薇の押し売りの話は、『善蔵を思う』『市井喧争』に描かれていま

す。前者では、不愉快に思いつつも、丁寧に応対したかのように描かれていますし、後者では、相手が絡むのに恐怖、困惑しつつも丁々発止やりあったかのように描かれています。

美知子夫人曰く、「（この食い違いは）これはどういうことなのだろう。偽（いつわり）かまことかという人だ――と私は思った。」

●　多額の税金通知を前に、メソメソ泣き周章狼狽する太宰

太宰の生活無能力的な様子は、多額の納税通知を受け取った経過からも伺い知ることができます。

太宰は結婚後もずっと、津軽の国許から、月額九十円の仕送りを受けていました。作家としての収入はまだ不安だったものの、太宰

はそれを生活費に充てるというよりは、全部自分で遣ってよい小遣いだと考えていたようです。裕福な地主の家に生まれ育ったがために身についた経済観念だったと、美知子夫人は言っています。

やがて、太宰の作品も売れるようになり、全集も発刊され、終戦後に印税収入が急増するようになって仕送りは辞退したとのこと。その頃、ひどいインフレを抑えるための金融緊急措置として預金封鎖がなされました。いくら銀行預金があっても自由に払い戻しはできず、税務署が証明した所得の金額によって払い戻し額が決められたといいます。そして、その所得の金額の証明依頼は、本人の申告で行う仕組みだったのだそうです。人気作家の列に加わり、原稿依頼、出版申し込みも急増したことから、やや控えめに、それでも「五千円」との所得（昭和二十年分）の証明依頼を武蔵野税務署にし、得意になっていたとのこと。

太宰とすると、その先の納税のことはあまり念頭になく、これで毎月五百円ずつ銀行から引き出すことができるようになり、闇の高価なウィスキーや外国煙草を買い入れるための十分な小遣いが確保できる、と踏んでいたようでした。

ところが、翌年の所得の申告は行わず、翌々年の昭和二十三年二月末になって、前年の所得金額を二十一万円と決定し、納税額十一万七千円とする告知書が届きました。インフレを考慮して、二十二年の所得を、五千円の四十倍に査定され、その半分近い納税を迫られたのですから焦るのはわかります。しかも、納税期限は、一月後の三月下旬ですから、太宰は納税通知書を前に周章狼狽し、泣いた由。美知子夫人が言うには、泣き方が形容どおりメソメソ、という泣き方で、坊ちゃんが外で腕白どもにいじめられて泣いて訴えているのと同じだったそうです。

そこからの対応がまた信じられないのですが、美知子夫人が相談しようにも来客対応で話し合いもできず、結局、審査請求ができるとあるのに、それを放置して熱海に行ってしまったとのこと。帰京したときには、審査請求期限が切れていて、「自分のような毎日、酒と煙草で莫大な税金を納めている者が、この上、税金を納めることはない」と駄々っ子のように言うばかり。

美知子夫人がやっとのことで、期限切れ後の審査請求書を書かせ持参し、国税局との折衝も始まりますが、日頃から収入のことを一切知らされておらず事情がわからない美知子夫人では窮するばかりです。そして六月二日になって、国税局の人が太宰を訪ねて来ますが、その数日後の六月十四日になって太宰は入水心中をしました。

美知子夫人は、「この税金のことが死の原因になっているとは思われない」と書いていますが、太宰が一般の生活人としての能力を

いささか欠いていたことを示すエピソードのひとつに思われます。

なお、三鷹では、当時はガスや水道もなかったため、煮炊き、井戸水の汲み上げも大変だったそうですが、力仕事や大工仕事など女手に余る雑用が次々と出て来るのに、太宰はいっさい手をださなかったとのこと。美知子夫人は、「隣近所のまめな旦那さんを羨ましく思うこともあった」と回想しています（以上は、美知子夫人の『回想の太宰治』によります。）

●　壇一雄を人質にして遁走した「熱海事件」が、『走れメロス』のヒント？

嵐山光三郎さんの『文人悪食』や、猪瀬直樹さんの『ピカレスク

―太宰治伝』に、壇一雄を人質にして遁走した「熱海事件」のことが紹介されています。

時期は、太宰はパビナール中毒で入院していた武蔵野病院から退院した後になります。家にいると気が塞ぐから、といって師の井伏鱒二の紹介で、熱海の旅館に移ります。ところが一ヵ月たって連絡が途絶えたので、不安になった内妻の初代さんから、壇一雄が、太宰が熱海に行ったまま帰ってこないので、金がないので困っているだろうから届けてくれと頼まれたのだそうです。初代さんから預かった七十数円を持って熱海に行ったら、太宰は壇を小料理屋に連れ出し、高級天ぷら屋で上等な天ぷらを講釈を垂れながら食べたそうです。勘定を聞くと、二十八円七十銭というべらぼうな額で、「太宰は血の気がうせていくようだった」とのこと。

支払ったのち、そのまま三日間飲んで遊女と遊び、金が無くなった

ところで、太宰が菊池寛のところに行って金を借りてくると言い出し、壇を人質に残して、東京に戻りました。その時点での熱海での遊興による借金は、三百円にものぼったそうです。壇は、旅館で軟禁状態になったものの、十日たっても帰ってきません。業を煮やした料理屋の主人が見張り役となり壇を伴って、太宰を捜しに東京に来ました。井伏鱒二のところに行ったら、太宰は井伏と将棋を指していたので、壇は激怒して、大声を上げると太宰は狼狽しつつも、低い声で、「待つ身が辛いかね、待たせる身がつらいかね」と言ったそうです。

太宰は、東京に戻ってから永井龍男に会って、菊池寛への借金を申し込んだものの永井が取り合わなかったのだそうです。井伏鱒二が羽織袴を質入してくれたり、佐藤春夫が用立てしてくれて何とか収まったそうです。パピナール中毒で入退院を繰り返していた時期

なので、その影響もあったのかもしれませんが、それにしても、すごい話です。

この四年後に『走れメロス』が書かれていますが、そこでは、処刑される運命にあるメロスは、自分の身代わりとして友人セリヌンティウスを人質として置き、妹の婚礼に出るため三日間の猶予をもらいます。幾多の難儀を潜り抜け、信頼されていることに力づけられて走って刑場に急ぎます。もう間に合わないから走るのをやめるようにいう弟子に、「信じられているから走るのだ。間に合う間に合わないは問題ではない」と叫びます。

友人を人質にしたり、戻るために焦っている、というパターンは同じです。嵐山さんは、「壇一雄は、『おそらく、自分の熱海行きがこの小説の発端じゃないかな』とえび天を食べながら言ったものだ」と書いていますが、日本中の児童生徒を感動させる『走れメロ

ス』が、太宰による熱海での壇一雄人質遁走事件をヒントとしていると思うと、思わず噴き出してしまいます。そんなことを、「えび天を食いながら」語る壇一雄の姿も傑作です。

● 三島由紀夫らに嫌われ、中原中也に毒づかれた太宰

割腹自殺を図ったかの三島由紀夫は、太宰治を嫌っていたとされています。

Wikipediaには、次にように紹介されています。

「1947年（昭和22年）1月、太宰治、亀井勝一郎を囲む集いに参加。この時、三島は太宰に対して面と向かって『僕は太宰さんの文学は

嫌いなんです』と言い切った。このときの顛末について、後の三島自身の解説によれば、この三島の発言に対して太宰は虚を衝かれたような表情をして誰へ言うともなく『そんなことを言ったって、こうして来てるんだから、やっぱり好きなんだよな。なあ、やっぱり好きなんだ』と答えた、と解説されている。しかし、その場に居合わせた編集者の野原一夫によれば、『きらいなら、来なけりゃいいじゃねえか』と吐き捨てるように言って顔をそむけた、という。」

三島は、この当時、東京帝国大学の学生で、卒業直前でした。その後、太宰が入水自殺した後の、昭和三十年に発刊された『小説家の休暇』では、次のように批判しています。

「私が太宰治の文学に対して抱いている嫌悪は、一種猛烈なものだ。

第一私はこの人の顔がきらいだ。第二にこの人の田舎者のハイカラ趣味がきらいだ。第三にこの人が、自分に適しない役を演じたのがきらいだ。女と心中したりする小説家は、もう少し厳粛な風貌をしていなければならない。

私とて、作家にとっては、弱点だけが最大の強みになることぐらい知っている。しかし弱点をそのまま強みへもってゆこうとする操作は、私には自己欺瞞に思われる。どうにもならない自分を信じるということは、あらゆる点で、人間として僭越なことだ。ましてそれを人に押しつけるにいたっては！

太宰のもっていた性格的欠点は、少なくともその半分が、冷水摩擦や器械体操や規則的な生活で治される筈だった。生活で解決すべきことに芸術を煩わしてはならないのだ。いささか逆説を弄すると、治りたがらない病人などには本当の病人の資格がない。」

なかなか辛辣(しんらつ)ですが、最後まで嫌い抜いたというわけでもなく、晩年には、太宰と共通するところを感じていたとも言われます。

そして、太宰を嫌って取っ組み合いの喧嘩までしたのが、詩人の中原中也でした。嵐山光三郎さんの『文人悪食』によれば、中原中也は、「破滅的攻撃的性癖で、酒癖が異常に悪かった」と言います。永井龍雄は、中也を評して「(相手が弱いと見ると)傍で見ていても辛くなるほどの扱いを臆せずにした。ネコが獲物のネズミをもてあそぶように、前から後から相手を翻弄する」性格だったとのこと。文芸評論家として脚光を浴びる中村光夫を、初対面でその頭をビール瓶で殴ったり、銀座の酒場で飲んでいる坂口安吾相手に飛びかかって、「髪ふり乱してピストンの連続、ストレート、アッパーカッ

ト、スイング、フック、息をきらして陰にむかって乱闘している」。この酒場は、中原が喧嘩ばかりするので誰も寄り付かなくなり、つぶれてしまった由。

その中原が、気が弱い太宰治に絡んだのだそうです。草野新平と壇一雄、太宰とで飲みに行き、酔いが回るにつれて、太宰に、「何だ、おめえは。青鯖が空に浮かんだような顔をしやがって。全体、おめえは何の花が好きなんだい」。

太宰は閉口して泣き出しそうな顔で口ごもり、思いつめた声で、「モ、モ、ノ、ハナ」と答えたところ、薄笑いを浮かべながら、「チェッ、だからおめえは」と言って、あとは壇らと乱闘になった由。壇一雄は丸太を振り回したとあります。太宰はいつの間にか消えたようです。

二回目に飲んだときは、中也の絡みに閉口して先に帰った太宰の

家に、中也が押しかけ、勝手に二階に入り込んで、狂態を演じたところを、壇に雪の上に投げつけられた由。中也は、例の「汚れちまった悲しみに　今日も小雪の降りかかる」という詩を低吟しながら去っていったそうです。

太宰は、百七十五センチの大男でしたし、意外と肉体屈強だったそうですから、その気になれば勝てたことでしょう。太宰は大酒飲むけれども、絡まない酒だったそうです。中也のしつこい絡み、毒づきに困惑する太宰の様子が目に浮かんできて、気の毒になってきます。

● 芥川賞受賞を懇願し、落選して恨み節を垂れ逆上する太宰

太宰治は、芥川龍之介に心酔し、敬愛していました。弘前高校の

一年生のときに、その芥川が「ただぼんやりした不安」という遺書を残して自殺しました。しばらくはそのショックで下宿に籠もりっぱなしだったといいます。

それほど敬愛した芥川でしたから、その名前を関した芥川賞が昭和十年に創設されると聞いた時、太宰は是が非でも受賞したいと熱望しました。

『文藝春秋』一月号に、「芥川・直木賞宣言」というものが載り、賞金は五百円、「受賞者には広く各新聞雑誌へ引き続き作品紹介の労をとる」とありましたから尚更です。以下、猪瀬直樹『ピカレスク―太宰治伝』をもとにして、落選をめぐる動きを紹介します。

芥川賞の選考委員は、菊池寛のほか、佐藤春夫、谷崎潤一郎、室生犀星、川端康成ら十名強でした。「逆行」と「道化の華」が対象となりえましたが、文学仲間の山岸外史が佐藤春夫に、「道化の華」

の一読を勧めたところ、「甚だおもしろく存じ候。無論及第点をつけ申し候」との返事が返ってきました。この作品は、その直前に書いた鎌倉での田部あつみとの心中事件をテーマにし、担ぎ込まれた病院での入院生活の回想になっています。また、都新聞が消息通が語るところによれば、として、「お鉢は太宰に回るのではないか」と下馬評を書いたため、太宰は得意満面で、すっかりその気になってしまいました。弟分の画家の卵を相手に、「僕、芥川賞らしい」と言いつつ、説教を垂れています。

ところが、ふたを開けてみれば、受賞したのは石川達三の「蒼氓」でした。選考会では、本命の「道化の華」は外れ、最終候補作に残ったのは「逆行」のほうでした。太宰は、落胆し、「対象は全く無名の作家という方針らしい。僕は有名だから、他の二流、三流の薄汚い候補者と並べられるのは不愉快だ」と強がってみせたり、山岸

には「もっと売り込んでくれたら、絶対保証するといってくれたらよかったのだ」と喰ってかかり、あげく「石川達三のどこが偉いんだ。俺のほうがずっと・・・」と口走ってしまい、「君のは文壇への執念であって、文学への執念じゃない」とたしなめられます。遠浅の海を沖に向かって歩き出して、内縁の妻の初代が泣きながら引き戻したこともありました。

『文藝春秋』に載った選評が、太宰を逆上させます。それは、川端康成の評で、「なるほど『道化の華』の方が作者の生活や文学観を一杯に盛ったいるが、私見によれば、作者目下の生活に厭な雲ありて、才能の素直に発せざる憾みがあった」とありました憤怒に燃えた太宰は、『文藝通信』に川端への反論を載せます（「川端康成へ」）。

「おたがいに下手な嘘はつかないことにしよう。私はあなたの文章を本屋の店頭で読み、たいへん不愉快であった。これでみると、まるであなたひとりで芥川賞をきめたように思われます。これは、あなたの文章ではない。きっと誰かに書かされた文章にちがいない。」「小鳥を飼い、舞踏を見るのがそんなに立派な生活なのか。刺す。そうも思った。大悪党だと思った。」等々。

しかし、川端は翌月の『文藝春秋』で選考経過を紹介し、石川達三の圧勝で、「あっけない程簡単明瞭な決定だった」とばっさり切り捨てます。

その後、第二回目の芥川賞に向け、佐藤春夫宛に歳暮を贈ります。その返事には、「努めて厳粛なる三十枚を完成されよ。金五百円は君がものたるべしとぞ」とあったのに意を強くして、選考会の頃に、

切々とした手紙をしたためます。

「佐藤さん一人がたのみでございます。私は、恩を知っております。・・・芥川賞をもらえば、私は人の情に泣くでしょう。そうして、どんな苦しみとも戦って、生きて行けます。元気が出ます。お笑いにならずに、私を、助けてください。・・・」

しかし、結果は候補作にものぼらず、「受賞作なし」でした。第三回目に向け、友人や師らとの私信のやりとりや、鎌倉での心中未遂事件の生々しい現場の描写も盛り込んだ「虚構の春」を、佐藤春夫に伝を頼んで発表にこぎつけます。処女出版『晩年』も何とか刊行できました。それを川端康成に送って礼状が届いたのを幸い、川端にも懇願の手紙をしたためます。

「厳粛の御手翰に接し、わが一片の誠実、いま余分に報いられた心地にて、鬼千匹の中には、仏千体も負わすのだと、生きて在ることの尊さ、今宵しみじみ教えられました。・・・第二回目の芥川賞、くるしからず、生まれてはじめての賞金、わが半年分の旅費、あわてず、あせらず、生まれてはじめての賞金、わが半年分の旅費、あわてず、あせらず、充分の精進、静養もはじめて可能、労作、生涯いちど報いられてよしと、客観数学的なる正確さ、一点うたがい申しませぬ。何卒、私に与えてください。・・・私に希望を与えて下さい。老母、愚妻を、いちど限り、喜ばせて下さい。私に名誉を与えてください。」

川端を「大悪党」と難詰して一年も経っていないうちに、臆面もなくこのような手紙をしたためられるというのは、普通の人間では

考えられないことでしょう。しかし、結果は落選でした。川端は評価してくれたのですが、ルールが突然変わって、前回までに候補となった作家は除外されることになったのです。

太宰は脱力し、パピナール中毒の治療のため武蔵野病院に入院します。その間、妻の初代が画学生と間違いを犯し、翌年、水上温泉で心中未遂を起こすに至りました。

● 大御所の志賀直哉に噛み付いた太宰

佐藤春夫や川端康成には、臆面もない懇願の手紙を送った太宰ですが、文壇の大御所の志賀直哉には、批判の飛礫を投げつけています。それが、「如是我聞（にょぜがもん）」と題する連載評論でした。

志賀直哉は、当時の文学青年から崇拝され、「小説の神様」と呼ばれていました。この評論は、入水心中で亡くなる昭和二十三年の二月から連載を開始しています。直接のきっかけは、太宰の『津軽』でけなされた志賀が気分を害し、文士との座談会で、「『斜陽』に登場する貴族の娘の言葉遣いが山出しの女中のようで閉口した、もう少し真面目にやったらよかろう」と批判されたことでした。志賀は旧制学習院出身で、貴族社会をよく知っていたのです。これに太宰が反発しエスカレートしたもので、良く言えば、権威主義への反発、既成文学に対する本質的批判。悪く言えば、罵詈雑言。読む人によって、受け止め方はかなり違ってくることでしょう。

後半では、志賀直哉を相手に、「おまえ」とか「あいつ」という調子で、酒でも飲んでいるかのように、ぼろくそに叩いています。

・或る「老大家」は、私の作品をとぼけていていやだと言っているそうだが、その「老大家」の作品は、何だ。正直を誇っているのか。何を誇っているのか。その「老大家」は、たいへん男振りが自慢らしく、いつかその人の選集を開いてみたら、ものの見事に横顔のお写真、しかもいささかも照れていない。まるで無神経な人だと思った。

・何処（どこ）に「暗夜」があるのだろうか。ご自身が人を、許す許さぬで、てんてこ舞いしているだけではないか。許す許さぬなどというそんな大それた権利が、ご自身にあると思っていらっしゃる。いったい、ご自身はどうなのか。人を審判出来るがらでもなかろう。志賀直哉という作家がある。アマチュアである。六大学リーグ戦である。小説が、もし、絵だとするならば、その人の発表しているも

のは、書である、と知人も言っていたが、あの「立派さ」みたいなものは、つまり、あの人のうぬぼれに過ぎない。腕力の自信に過ぎない。本質的な「不良性」或いは、「道楽者」を私はその人の作品に感じるだけである。高貴性とは、弱いものである。へどもどまごつき、赤面しがちのものである。所詮あの人は、成金に過ぎない。

というような調子ですが、まだこれでも、この後のトーンと比べればおとなしいものです。座談会での太宰批判を読んでからは、「おまえ」と呼んで、ヒートアップしていきます。

・いったい、あれは、何だってあんなにえばったものの言い方をしているのか。普通の小説というものが、将棋だとするならば、あいつの書くものなどは、詰将棋である。王手、王手で、そうして詰む

にきまっている将棋である。旦那芸の典型である。勝つか負けるかのおののきなどは、微塵(みじん)もない。そうして、そののっぺら棒がご自慢らしいのだからおそれ入る。

どだい、この作家などは、思索が粗雑だし、教養はなし、ただ乱暴なだけで、そうして己れひとり得意でたまらず、文壇の片隅にいて、一部の物好きのひとから愛されるくらいが関の山であるのに、いつの間にやら、ひさしを借りて、図々しくも母屋に乗り込み、何やら巨匠のような構えをつくって来たのだから失笑せざるを得ない。

・この者は人間の弱さを軽蔑している。自分に金のあるのを誇っている。「小僧の神様」という短篇があるようだが、その貧しき者への残酷さに自身気がついているだろうかどうか。ひとにものを食わせるというのは、電車でひとに席を譲る以上に、苦痛なものである。

何が神様だ。その神経は、まるで新興成金そっくりではないか。またある座談会で（おまえはまた、どうして僕をそんなに気にするのかね。みっともない。）太宰君の「斜陽」なんていうのも読んだけど、閉口したな。なんて言っているようだが、「閉口したな」などという卑屈な言葉遣いには、こっちのほうであきれた。

どうもあれには閉口、まいったよ、そういう言い方は、ヒステリックで無学な、そうして意味なく昂ぶっている道楽者の言う口調である。ある座談会の速記を読んだら、その頭の悪い作家が、私のことを、もう少し真面目にやったらよかろうという気がするね、と言っていたが、唖然とした。おまえこそ、もう少しどうにかならぬものか。

・おまえはいったい、貴族だと思っているのか。ブルジョアでさえ

ないじゃないか。おまえの弟に対して、おまえがどんな態度をとったか、よかれあしかれ、てんで書けないじゃないか。家内中が、流行性感冒にかかったことなど一大事の如く書いて、それが作家の本道だと信じて疑わないおまえの馬面がみっともない。
強いということ、自信のあるということ、それは何も作家たるものの重要な条件ではないのだ。

・も少し弱くなれ。文学者ならば弱くなれ。柔軟になれ。おまえの流儀以外のものを、いや、その苦しさを解るように努力せよ。どうしても、解らぬならば、だまっていろ。むやみに座談会なんかに出て、恥をさらすな。無学のくせに、カンだの何だの頼りにもクソにもならないものだけに、すがって、十年一日の如く、ひとの蔭口をきいて、笑って、いい気になっているようなやつらは、私のほうで

も「閉口」である。勝つために、実に卑劣な手段を用いる。そうして、俗世に於て、「あれはいいひとだ、潔癖な立派なひとである」などと言われることに成功している。殆んど、悪人である。君たちの得たものは、（所謂文壇生活何年か知らぬが、）世間的信頼だけである。志賀直哉を愛読しています、と言えばそれは、おとなしく、よい趣味人の証拠ということになっているらしいが、恥しくないか。その作家の生前に於て、「良風俗」とマッチする作家とは、どんな種類の作家か知っているだろう。

「おまえの流儀以外のものを、いや、その苦しさを解るように努力せよ。」・・・あれだけ家族や周囲に迷惑をかけ続けて、自己の流儀を貫き通した太宰に言われると、苦笑したくなりますが、長年にわたり何かにつけて批判されてきた被害者意識による鬱屈が、一

気に噴き出した形なのでしょう。
　そして、猪瀬直樹さんの『ピカレスク―太宰治伝』の描くところによれば、この烈しい評論も、新潮社の野平健一に強く言われて口述筆記されたもので、公表前提で口述を始めるには、かなり躊躇したようです（ただ、それも一時的なものだったようですが）。
志賀も、太宰の死後の八月に「太宰治の死」と題する一文を著し、「私は太宰君が私に反感を持つている事を知つていたから、自然、多少は悪意を持つた言葉になつた」「太宰君が心身共に、それ程衰へている人だといふ事を知つていれば、もう少し云ひようがあつたと、今は残念に思つている」としています。
　なお、この評論も最初は、師でもあり、恩人でもある井伏鱒二への批判も込められていたようです。井伏がかつて、「時代屋の雛女

房」という短編を書き、それがパピナール中毒で狂った亭主が借金を重ね、その妻が泣いているという、太宰と初代の姿を露骨に描いていることを知ったこと、あるいは、「斜陽」が当たった後、井伏宅で飲んで寝ている際、隣室で「太宰君にも困ったものだな」との井伏の声に続き、「人気が出ていい気になっているけど、つまりはピエロさ」という応答が続き、皆どっと笑ったという出来事があったこと。井伏鱒二全集編纂に力を尽くしているのに、それへの感謝がなく、摂生を呼びかける手紙ばかりが来たこと、といったようなこともきっかけとなったようです。井伏全集の解説でも、かなりの批判と皮肉を滲ませて書いていますし、玉川心中に当たり残した遺書に、「井伏さんは悪人です」というフレーズを書いたことも、その流れでしょう。

●　四回の心中、自殺未遂事件の後の玉川心中

太宰治は、昭和二十三年六月十三日に、三鷹の玉川上水で、山崎富栄と入水心中するまでに、四回の心中未遂、自殺未遂を起こしています。

先の紹介したように、最初が弘前高校の三年生の時で、地主階級の自分に悩んだのか、あるいは芥川龍之介の自殺に触発されたのか、カルモチンを多量に服用しています。その次が、東京帝大の学生時代に、芸妓の小山初代との結婚を実家にしぶしぶ認められた直後、カフェ『ホリウッド』の女給田部あつみと鎌倉心中未遂事件を起こします。太宰は生き残り田部は死亡しました。太宰は自殺幇助罪で取り調べを受け、兄が青森県議だったこともあり、新聞にも大きく

取り上げられました。芥川賞狙いで書いた「虚構の春」には、「突然、くすりがきいてきて、女は、ひゅう、ひゅう、と草笛の音に似た声を発して、くるしい、くるしい、と水のようなものを吐いて、岩のうえを這いずりまわっていた様子で・・・」と生々しく書いたり、末期の「人間失格」では、取り調べの検事の発言として、「おう、いい男だ。これあ、お前が悪いんじゃない。こんな、いい男に産んだお前のおふくろが悪いんだ」と書いたりしています。

心中の理由として、多額のツケ払いを田部あつみが負担してくれていて限界を越えていたという事情はありますが、不可解なのは、自分から望んだはずの小山初代と結婚できることになったその直後に、なぜ心中しなければならないのかという点です。猪瀬直樹さんは、本気で死ぬつもりだったら致死量を飲むはずだし、作品とは異なり実際には入水していないことなどから、偽装心中だと推定して

います。
太宰は、小山初代に対する気持ちとして、自分がこれだけ実家との関係で苦しんでいるのに、初代は青森に戻ったらすっかりのんびりしてしまって、自分の苦境（分家除籍のことなど）など知らない様子に苛立ちを隠していません。分家除籍は太宰にとっては大きなショックでした。このような事情から、「もし別の女と事件を起こしたら、小山初代は怒り心頭で婚約破棄を申し出るに違いない。そうなれば分家除籍も取り消しになる。津島家として、『ホリウッド』に借金などあってはならぬ、とすぐに支払うだろう。左翼運動とも縁が切れるかもしれない。不可抗力とすれば自分への言い訳ができる。」と推測し、計算外の事態となってしまって、悲惨な結末となり、消し去ることのできない記憶となってしまったとしています。
その後、東京帝大除籍直前の鎌倉での首吊り自殺未遂、武蔵野病

院入院中の初代と画学生との姦通事件後に、水上温泉にて初代との心中未遂がありました。この心中未遂が昭和十二年、太宰が二十八歳のときです。その後十年を経て最後に実際に死を遂げるのが、昭和二十三年の玉川上水での山崎富栄との心中でした。

昭和二十二年三月に、山崎富栄と三鷹駅前の屋台で知り合い、同棲するようになります。彼女は、容姿に優れた美容師で、進駐軍専用の施設内の美容室にで勤めていた関係で、高級ウィスキーや高級煙草を入手できる立場にいました。

やがて彼女の部屋が応接の場のようになり、彼女は身の回りの世話係兼マネージャーのような存在となりました。太宰の自虐的でわが身を苛むような酒の飲み方と接待ぶりを心配し、来客をブロックするようになり恨まれたりもしたようです。「斜陽」のモデルである太田静子とのやり取りを、太宰の代理として仕切ったのも、彼女で

した。

最後、彼女との心中に至った要因ははっきりとしていませんが、周囲からいじめられているという被害者意識、摂生をひたすら勧める井伏への微妙な反発、志賀直哉ら文壇からの批判、かつての鎌倉七里ガ浜での心中で女性を死なせてしまった悔恨、山崎富栄との別れの難しさ、肺結核で溜まった水による胸の痛み等々、いろいろな見方があるようです。死の直前の六月に入ってからは、富栄による「幽閉」により暴飲はなくなったようですが、仕事場のあった飲み屋の「『千草』の夫婦は、夜半に富栄の部屋から、道を隔てた自分たちの家まで響いてくる、吠えるような太宰の呻き声を、何度も耳にした。それは一分間ほどつづき、あとは森閑として何も気配もない」（長部日出雄『桜桃とキリスト―もうひとつの太宰治伝』）という状態だったそうです。

○　妻に宛てた太宰の遺書（抜粋）

「永居するだけ　みんなを苦しめこちらも苦しく、堪忍して下されたく」

「皆、子供はあまり出来ないようですけど陽気に育てて下さい。あなたを嫌いになったから死ぬのでは無いのです。小説を書くのがいやになったからです。みんな、いやしい欲張りばかり。井伏さんは悪人です」

「美知様　誰よりもお前を愛していました」

※　反故となった文章からの断片ですが、一九九八年に正式の遺書が公開され、同趣旨のしっかりした筆跡のものである由。非公開

部分もあるのだそうです。

※　この他に、その二階が仕事場であった飲み屋の「千草」の夫婦あてに、「永いあいだ、いろいろと身近く親切にして下さいました。忘れません。おやじにも世話になった」との遺書を残しています。

○　山崎富栄の当日の遺書（抜粋）

「六月十三日
遺書をお書きになり　御一緒に連れて行っていただく
みなさん　さようなら
（中略）
奥様すみません

修治さんは肺結核で左の胸に二度めの水が溜まり、このごろでは痛い痛いと仰言るの、もうだめなのです。
みんなしていじめ殺すのです。いつも泣いていました。
豊島先生（注：作家の豊島与志雄）を一番尊敬して愛しておられました。
野平さん、石井さん、亀島さん（注：いずれも編集者）、太宰さんのおうちのこと見てあげてください。
園子ちゃん（注：太宰の七歳の長女）ごめんなさいね。

太宰は本当に死ぬつもりだったのか、という指摘は根強くあったようです。
太宰治の東京での不始末などの世話をずっとしてきた津島家出入り

の商人である中畑慶吉氏の証言を、嵐山光三郎さんが紹介しています。

中畑氏は、太宰の自殺を心配した津島家から頼まれて、三鷹警察署に警戒を依頼しています。証言では、

「（心中場所は）見ると下駄を思いきり突っ張ったあとがあります。しかも手をついて滑り落ちるのを止めようとした跡もくっきりとついておりました。一週間もたち、雨も降っているというのに歴然とした痕跡が残っているのですから、よほど強く『イヤイヤ』をしたのではないでしょうか」（『文人悪食』）

山崎富栄による無理心中ではないか、との指摘もあったようです。他方で、遺書の内容、肺結核が悪化していたこと、不眠症で悩んで

いたこと、二人は腰のところで紐で結ばれていたことなどから、若い時の心中未遂のようなものとは違い、死ぬ覚悟は確かだったという見方が一般的です。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

こうして見てくると、知人、身内にしたら大変だとは思うものの、太宰治が何とも人間的で、愛らしく感じてきますから不思議です。「ショーモナイなぁ・・・」と微苦笑を誘われます。

しかし、太宰が作品を生み出すときの迫力は、美知子夫人も「人が変わったような」と形容しているように、凄いものがあったそうです。美知子夫人にしろ、新潮社の編集者の野平健一氏にしろ、太宰が口述すると、それがそのまま作品になると、驚嘆の思いで回想

しています。

また、太宰は、作品が出来上がると、それを美知子夫人らに朗読して聴かせたとのことです。独白風の一人称の語りの作品が多いだけに、それらの朗読を聴くことは、太宰治にとっても意に沿った読まれ方ではないかと思います。

太宰治が生み出したそのような作品を、朗読でじっくり味わっていただき、その魅力に浸っていただければ幸いです。

（主な参考文献）

津島美知子『回想の太宰治』（講談社文芸文庫）
猪瀬直樹『ピカレスク―太宰治伝』（文春文庫）

長部日出雄『辻音楽師の唄―もうひとつの太宰治伝』（文春文庫）
同　『桜桃とキリスト―もう一つの太宰治伝』（文春文庫）
嵐山光三郎『文人悪食』（新潮文庫）
臼井吉見「太宰治伝」（現代日本文学館『太宰治』所収）（文春文庫）

（注）他にも、壇一雄『小説太宰治』（岩波現代文庫）、奥野健男『太宰治論』（新潮文庫））、野原一夫『太宰治　生涯と文学』（ちくま文庫）などがありますが、全部は参照しきれていません。ただ、壇一雄の著書に記されたエピソードは、嵐山光三郎氏の『文人悪食』中で言及されているようです。